

日本の音楽教育メソッドの展開 ーベネズエラ エル・システマの礎ー

菊川 穰

エル・システマとは、子どもたちに無償でオーケストラやコーラス等の集団での音楽教育を与えることで、自己肯定感や社会性を高めることを目的とした社会包摂的な芸術活動である。高名な経済学者、宗教者、政治家でもある音楽家ホセ・アントニア・アブレウのリーダーシップのもと、音楽関係者によるベネズエラで1975年に一民間活動として始まった。しかし、後に国家事業となり、現在では、約90万人の子どもが、国内に広がる200以上の活動拠点に参加する、世界最大の音楽教育プログラムとなり、理念に共鳴した活動が70以上の国・地域で展開している。

組織としては、現在は、シモン・ボリバル音楽財団(Fundación Musical Simón Bolívar-FMSB)と名称を変えているが、当初はFESNOJIV(La Fundación del Estado para el Sistema Nacional de las Orquestas Juveniles e Infantiles de Venezuela-国立財団ベネズエラ児童青少年オーケストラシステム)が運営主体で、この名称にあるオーケストラシステムという部分がエル・システマという通称のもとになっている。現口サンゼルスフィルハーモニックの音楽・芸術監督であるグスターボ・ドゥダメル、ベルリンフィルハーモニックに史上最年少(当時)で入団したコントラバス奏者エディクソン・ルイス等、世界的な音楽家を輩出しており、その芸術性の高さは、故クラウディオ・アッパード、サイモン・ラトル、プラシド・ドミンゴ等の世界的巨匠音楽家

から絶賛されている。

経済的、社会的に困難な状況にある子どもたちも、一流の芸術体験を積むことで、その困難を乗り越えていける力を身につけることができ、そのことが、周りの大人を変え、いずれは社会も変えていく、という大きな理想。故に、富が偏在しており、麻薬犯罪等に巻き込まれ、命を失う若者が後を絶たない状況をふまえ、歴代のベネズエラ政権が、右派・左派という政治的立場に関わらずエル・システマを国家事業として支え、拡大してきた。また、資金的な支援をベネズエラ政府経由で実施していた米州開発銀行(IDB)からも、子どもたちを犯罪から守る活動として費用対効果の面で評価されている。(IDB "IDB Country Strategy with the Bolivarian Republic of Venezuela 2011 - 2014")



クラシックの名曲だけでなく、それぞれの地域に根ざした民族音楽も取り入れている。経験のある子どもが、初心者を教える仕組みが、どこでも徹底されている



地域のショッピングセンターにて、マーラー第2交響曲を演奏するエル・システマの子どもたち。毎週、ベネズエラ国内300地域にある活動拠点で、このような家族や地域に無料で開かれたコンサートが行われている(写真は、特記ないものはすべて執筆者撮影)

実は、このエル・システマが始まるにあたって、日本発の才能教育研究会(スズキ・メソッド)が大きな影響を与えた。スズキ・メソッドは、音楽家の鈴木鎮一が、戦後間もない頃に創設した全国幼児教育同志会が始めた音楽教育メソッドである。人は誰でも言語習得ができるように、音楽においても「どの子も育つ」という理念に基づき、「平易なことを立派にできるようになるまで育てる」、「難しくなっていくことを、少しも子どもに感じさせぬよう、自然に程度を進めていくこと」を基本的な指導方法としている(鈴木鎮一『鈴木鎮一全集1、能力の発見』)。

学習原理としては、①真似、②認識、③能力の発揮と、まずは耳から詩歌を覚えるように復誦し、意味を理解できるようにし、最終的に、その内容を他者に伝えられるレベルに達するという構成になっている（鈴木鎮一、前掲書）。

1964年は、現在もソリストとして活躍するバイオリニスト大谷康子や東京大学名誉教授で現スズキ・メソッド会長の早野龍五を含む、全国から選抜された10人の子ども演奏家（テン・チルドレン）による米国への初めての演奏ツアーが行われた。エル・システマ創設時からのメンバーで、当時はイーストマン音楽大学に留学中、現在もアブレウの右腕として活躍しているピオラ奏者フランク・ディ・ポロは、このテン・チルドレンによる演奏を直接聴いて、とても感動したと語っている。さらに、このことが契機となり、米国でのスズキ・メソッドの拡大の立役者となるウィリアム・スターが、1972年にベネズエラを訪問、アブレウ、ディ・プロと交流を深めるということもあった。海外でも拡大の一途を辿るスズキ・メソッドに関心を寄せたアブレウは、1979年に松本の本部にディポロ、同じく創設メンバーでベネズエラ中央音楽大学長であった作曲家のエリック・コロンの視察団を日本に派遣し、現場での教室の様子を見学した。

このような背景のもと、戦前に鈴木から直接師事を受けた、当時世界的なバイオリニストとして活躍していた小林武史が、ベネズエラ政府文化庁から日本政府への要請に基づき、国際交流基金文化使節として1979年6月から派遣された。そこで、彼は当初想定していた文化交流大使としてコンサートで演奏をすることだけでなく、インディヘナのバイオリンも見たことも触ったこともない子どもたちに対して、スズキ・メソッドで指導するという途方もない課題をアブレウから与えられた。紆余曲折がありながらも、小林は全くの初心者であるインディヘナの子どもたちに、懇切丁寧に指導。2ヶ月後のコンサートで、スズキ・メソッドの定番である「きらきら星の主題による変奏曲」のみならず、ベートーヴェンの第9交響曲やベネズエラの国歌を演奏できるようにさせた。このことは、アブレウや他のFESNOJIV関係者を驚かせ、小林が寄贈したスズキ・メソッドの教本全巻をもとに弦楽器指導の体系を作っていく方針が

採用された（山田真一『エル・システマ』）。ただし、当時あった、ベネズエラ国立スズキメソッドアカデミーを作るという話は、様々な要因から実現は頓挫した。



リトミック（ダルクローズ・メソッド）の影響が見受けられる幼児向け歌と踊りのプログラム

しかし、エル・システマにおける弦楽器指導体系は、スズキ・メソッド教本に沿う形でのみ発展していったのではない。スズキ・メソッドでは極めて象徴的な「きらきら星の主題による変奏曲」等のモノフォニーで集団演奏することは行われておらず、全くの初心者から、ポリフォニーでのオーケストラ演奏を基本としている。また、歌唱を取り入れたカリキュラムが幼少期から組まれていることや、耳から覚えるのではなく読譜することを重視している点も、スズキ・メソッドの学習方法とは異なっている。2014年現地視察時に、練習の様子を観察し、スズキ・メソッドだけでなく、児童合唱で知られているハンガリーのコダーイ・メソッドやリトミックで有名なスイスのダルクローズ・メソッド等が、混ざり合う形で影響を与えていることが見受けられた。つまり、アブレウ他エル・システマの指導者は、スズキ・メソッドの方法論は受け入れながらも、世界中で展開し、成果が出ている様々な子ども向けの音楽教育メソッドを貪欲に試しながら、ベネズエラの風土や音楽環境に合うものを作り上げてきたと言える。参考までに、スズキ・メソッドが拡大していたベネズエラ以外の国々でも、ベネズエラでの国をあげてのエル・システマの取り組みを参考に、類似の活動を、国、州、地方自治体と様々なレベルで始めることがあった。2015～16年に、世界中で公開され話題を呼んだ、ブラジル映画“Tudo Que Aprendemos Juntos”（邦題：ストリート・オーケストラ）は、まさにブラジル・

サンパウロのスラム地域でのエル・システマ的な子どもオーケストラ活動を描いているが、そこで使用されている教授法はスズキ・メソッドであることは明らかである（映画『ストリート・オーケストラ』解説パンフレット）。



子どもたちの成長に合わせて、コントラバスもすべて小さいサイズを用意している

一方、アブレウ自身が認めているように、スズキ・メソッドが掲げる「どの子も育つ」という、鈴木の高邁な理想は、エル・システマにおいて強く意識されていると言える。環境を用意すれば、貧困や障害からもたらされる困難な状況に置かれている子どもも、音楽的才能は発揮され、そのことが、子どもたち自身のさらなる人間的発展につながるという思いは、まさに、エル・システマが掲げる理念そのものである。つまり、エル・システマがスズキ・メソッドから受けた影響は、単なる楽器演奏技術論的な側面を越えた、鈴木という希有な日本人音楽教育家の

思想の伝播が、注目されるべきではないかと考える。

そして、2012年3月に一般社団法人エル・システマジャパンが設立され、ベネズエラのシモン・ボリバル音楽財団と交わした覚書に則りエル・システマの理念を実現するための新たな挑戦を日本で開始した。東日本大震災という未曾有の大災害からの復興を見据え、アップバード、ラトルを通じた交流をきっかけにエル・システマの最大の理解者でもあるベルリンフィルのメンバーからの発案を元に、日本に既に存在する学校制度、部活動の仕組みと調和する形でのエル・システマ式音楽教育が始まっている。オーケストラや合唱等の仲間と共につくる音楽で、特に原発事故によって、心身ともに深い傷を負った福島県相馬市の子どもたちの心を癒し、生きる力を育むことを目的としている。当該自治体（教育委員会）の当事者性を重視しながら、指導カリキュラムを作り上げてきているが、ここでも関わっている指導者が、スズキ・メソッドを通して弦楽器教育を受けたものが多いという偶然がある。2014年6月からは岩手県大槌町での活動が始まり、2017年4月からは、被災地以外での事業展開として長野県駒ヶ根市、障害を持つ子どもたちのための合唱活動（ホワイトハンドコーラス）の試みが東京都でも始まっている。

こうした活動の礎には、様々な困難を抱える子どもたちも、その潜在能力を十分に発揮できるようになるべきで、そのことは集団での音楽教育で可能となるという考えがある。鈴木が掲げた理念が、その背景となっていることは明確である。鈴木鎮一の生



福島県相馬市でのエル・システマプログラム。子どものオーケストラ、合唱、地域の大人の合唱が総勢200人でつくるステージ（写真提供・Mariko Tagashira）

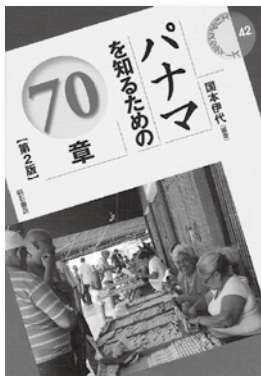
誕 120 年で、日本とベネズエラの外交関係樹立 80 周年でもある 2018 年 4 月 4 日には、スズキ・メソードの第 54 回目となるグランドコンサートが東京両国の国技館にて開催され、関係者の尽力により、相馬、大槌のエル・システマで学んだ子どもたちも参加、共演する機会に恵まれた。これを契機に、日本とベネズエラで生まれ、世界に展開する音楽教育の交流、協力が、今後も促進されることを祈願している。

2018 年 3 月 24 日、エル・システマ創設者アブレウが 78 歳で逝った。天国に行けばゆっくりできる、を口癖に毎日 4 時間しか眠らず、子どもたちのために働き続けた博士。安らかに永眠下さい。

(日本におけるエル・システマ活動についての詳細は <http://www.elsistemajapan.org>)

(きくがわ ゆたか 一般社団法人エル・システマジャパン代表理事)

ラテンアメリカ参考図書案内



『パナマを知るための 70 章【第 2 版】』

国本 伊代編著 明石書店

2018 年 1 月 344 頁 2,000 円＋税 ISBN978-4-7503-4619-9

「エリア・スタディーズシリーズ」のラテンアメリカに関わる 20 冊目の最新刊で、2004 年刊行の初版の歴史部分以外を全面的に改訂増補した新版。数字で読む 21 世紀のパナマ、16 世紀以降の歴史、運河の経緯と建設、米国との新運河条約、返還、運河のパナマ化、フリーゾーンと経済特区、小売り産業やマグロ養殖という新産業、コーヒーのスペシャリティ・ブランド化、ヒト・カネ・モノの交差点として運河通航隻数の増加と運河運営のための水資源の限界、立地を活かしたコパ航空等運輸産業の発展、ユニークな国際金融センターとタックスヘイブン、さらに麻薬の通過地点、食文化、さらにはパナマ社会の変化と課題を運河返還後の政治、観光立国への取り組み、移民流入超過の背景、運河返還後自立して国際的地位を確立し、多民族社会に変容したパナマに至るまで、全 70 章と 10 のコラムで解説している。

専門分野の異なる研究者、元外交官、民間の関係者 11 名が、ほとんど運河でしか知られていないこの国が、運河によって発生していた地域格差を是正する地域開発や環境破壊に対する植林を展開していて、欧米からの退職年金生活者の移住地となり、いまや先進国グループに迫ろうとする勢いにあるパナマの今の姿を紹介、解説している。

(桜井 敏浩)



『ハイチとドミニカ共和国

ーひとつの島に共存するカリブ二国の発展と今』

山岡 加奈子編 アジア経済研究所

2018 年 3 月 200 頁 2,500 円＋税 ISBN978-4-258-29048-2

1492 年のコロンブスの西インド諸島到達に始まるスペイン人のカリブ海地域植民地化の最初の拠点となったイスパニョーラ島に、中南米で最貧国のハイチと近年経済成長が著しく中心国になろうとしているドミニカ共和国がある。なぜここにこの 2 つの国があるのか？ 社会経済構造や政治体制、大国の介入など共通点が多く、1950 年代まで似たようであった両国が、その後かくも社会経済的な発展度合いが対照的になったのかを、開発を長期的発展経路と分岐から比較し、ハイチには現在なお政治的不安定性と「貧困の罟」から抜けるための政治・経済体制合意がないこと、両国の統計資料の分析からハイチの停滞、人々の生活社会・福祉政策の違いによる貧困の度合いや福祉政策の違いがあることを明らかにし、両国が並立存在するに至った歴史的経緯および米国との移民問題、麻薬問題、国際援助、そしてハイチからの移住者の増加から生じているドミニカでのレイシズムと反ハイチ主義を解析し、最後に各章で検証した議論をまとめて今後の研究課題について考察している。

同じ島にありながら、政治・経済的におおきく異なる 2 つの国を歴史的、政治的、経済的に比較し解き明かした、興味深い中南米地域研究。

(桜井 敏浩)